30 幕末から明治中期にかけての英米系医学の受容

大滝紀雄

近代日本における西洋医学受容の歴史は、杉田玄白らの『解体新書』の刊行に始まるといえよう。これを機会に蘭学の興隆を見、多数の蘭書の翻訳が試みられた。慶応四年四月横浜に軍陣病院ができイギリス公使館付き医官 William Willis が官軍の治療に当たった。明治と改元された同年七月横浜の軍陣病院は東京下谷に移され医学所兼大病院となった。明治二年大学東校となり、政府の方針としてはドイツ医学採用に決まったが、実際にドイツ人医師ミューレル、ホフマンの来日したのは明治四年である。

医学に限っていうならば、オランダ医学からドイツ医学に肩代わりしたように見えるが、幕末の西洋の学問は、英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語などで広く学ばれるようになり、蘭学という言葉はもはや適当でなく、洋学と呼ばれる時代となっていた。

表題の英米系医学の受容については二つの研究方法があると思う。第一は書誌学的方法で、第二は、日本に来た英米人医師の足跡と功績の追求である。

阿知波五郎著『近代日本の医学』西欧医学受容の軌跡によれば、

一　明治初期、イギリス系医学訳書原著　十三冊
二　アメリカ系とくにフィラデルフィア系　十三冊
三　ペンシルベニア大学関係　二十二冊
四　ペンシルベニア大学以外のアメリカ書　十二冊

なかでも、グレイの『解剖訓蒙図』、タンネルの内科書『医療大成』、ハルツホルンの『華氏病理摘要』『華氏内科摘要』、グロス『外科書』等はきわめて需要が多かった。英医ホブソン合信の『内科新説』『西医略論』『全体新論』等は上海で漢文で印刷された。阿知波によると日本における米英系の医学書出版の最盛期は明治五年から九年である。中山茂編『幕末の洋学』十九世紀西洋医学の受容では明治四年から七年にかけてが多い。この時期は大学

東校において本格的なドイツ系医学がまさに開花した時である。『幕末の洋学』は明治七年までの全国各地の図書館蔵書二百五十七部について調査したものだが、薬物書が主流を占め、内科、外科、解剖がこれに継ぐ。

阿知波によれば、訳者の性格は、一　米英系の医学者の大半は蘭学出身者である。二　洪庵の適塾、佐藤泰然、尚中の順天堂塾、松本良順に学んだ人たちが多い。三　東京大学医学部の前身の出身者もしくは関係者が多い。坪井信良、島村鼎甫、石井信義、足立寛、田代一徳、横井信之、樫村清徳、坪井為春、緒方惟準、松山棟庵、三宅秀、佐々木東洋、長谷川泰、高木兼寛、桑田衡平らのほか大阪、境を中心とした緒方郁蔵、松村矩明ら。

当時の米英系医学校ないし病院としては、慶応義塾医学所、成医会講習所、築地病院、横浜の十全病院、軍陣病院、一般病院、北海道の札幌、函館病院、神戸病院、長崎医学校、佐賀病院等があった。

『医学近代化と来日外国人』　世界保健通信社［付録］来日医学関係者リストによるとイギリス人三十九名、アメリカ人十五名、宣教医四十七名で、その内訳はイギリス人五名、カナダ人一名、他はすべてアメリカ人医師である。

明治二十年八月文部省告示によって、千葉、仙台、岡山、金沢、長崎の各高等中学校に医学部が設置され、東大卒業生が赴任し、ドイツ医学が定着する迄、日本各地で広く米英系の医学が行われていたのは間違いなく、種々の観点から深く追及すべき課題である。

（横浜市）